

11月7日 年間第32主日

Ⅱマカ 7:1～14 Ⅱテサ 2:16～3:5 ルカ 20:27～38

1. ルカ

v.27 「さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。」

この復活についての問答は、ほぼ同じ形で三つの共観福音書に収められています。恐らく、元来はサドカイ派とファリサイ派の人々の間で対立していた主張が、ここに持ち出されたものと思われます。間違いなくサドカイ派の人々の主張にも、“十分に立派な”(v.39)論理がありました。

現代人は、カトリック信者も含めて、ほとんど“復活についての問答”には関心がないように見えます。大多数の人々が、今や“死者の復活”を本気では信じていないし、信者の間でも、それが教会の宣教の“核心的主題”であるという理解が稀薄であるのが実状だからです。

マタイとマルコでは、「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしている」というイエスの痛烈な言葉を記録していますが、ルカ福音書では恐らく異邦人キリスト者を意識して、この部分をかなり丁寧な説明で補っています。それでも今日、私たちキリスト信者の間で、この問答におけるイエスの返答から福音の核心的主題を聞き取る人は少ないのです。そしてその原因はやはり、“聖書も神の力も知らない” ことにあるのです。

2.

ニケア・コンスタンチノーブル信条で“死者の復活”と書かれている部分が、使徒信条では“からだの復活”となっています。この用語法は、“肉の復活”ではないという神学的な主張に基づいているのです。それは初代キリスト教の宣教を、ギリシア的・プラトンのな靈魂不滅信仰から区別する明確な表象なのです。

西欧人でも日本人でも、人は肉体的に死んでも、そのまま引き続き霊の世界で生きているという考えに馴染んで来ました。墓の中でか、霊の世界でか、はたまた天国でか、その同じ人が生き続けているという理解です。当然、復活と言うことがあるとすれば、それはその人の生涯の“続き”ないし“第二幕”であって、“七人ともその女を妻にした”という過去を背負っているわけです。それが“肉の復活”です。

そのような理解を前提にして、いわば色眼鏡で聖書に向かうことによって、多くの人たちが“使徒たちが伝えた復活の福音”を曲げて解釈して来ました。共観福音書の“復活についての問答”は元来、そのような人々にとって実に挑戦的なテキストとして、そこに置かれていることに気づく必要があります。

「この世」(v.34)と「次の世(来るべき世)」(v.35)の間には全き断絶があるのです。それは“続き”でも“第二幕”でもありません。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」(21:27)というような表現も、この断絶の象徴以外の何ものでもありません。“天上の体と地上の体”、“自然の命の体と霊の体”、“土からできた人と天に属する人”という使徒パウロの対比(1コリ15:35-49)の意味を理解する人だけが、“からだの復活”という用語の神学的主張を受け入れることができるようになるのです。

3. II テサ

聖書は、各人が自己流に解釈していれば有益な知識が得られるというような書物ではありません。私たちキリスト者は、そこから使徒たちが伝えた福音を虚心に聴くことによってだけ、「永遠(来るべき世)の慰めと確かな希望」(v.16)を与えられるのです。「どうか、主が、あなたがたに神の愛とキリストの忍耐とを深く悟らせてくださるように。」(v.5)

4. II マカ

この物語りに収められている復活の希望が、初代教会のキリスト者の信仰をどれほど励ましたかは、想像に難くありません。しかし歴史の教会は、しばしば“復活の希望”よりも“殉教の美化”に傾く傾向を示して来ました。

事実カトリック信者の間では、殉教者の列福ということによってその行為が大いに崇められても、それら殉教者一人一人が“如何なる信仰理解(復活の希望?)”によってその生涯を歩んだのか、あるいは“彼らの信仰に共感する”というような話題については、語られない傾向があります。

この“聖書の学び”が、“ともにミサをささげる”すべての人の益となり、主の祈りの副文「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます」を、信仰をもって唱和することとなりますように。教会は“罪の赦し、からだの復活、永遠のいのち”を希望し、信じているのですから。

アーメン、ハレルヤ。

11月14日 年間第33主日

マラ 3:19～20a Ⅱテサ 3:7～12 ルカ 21:5～19

1. ルカ

v.6 「イエスは言われた。“あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。”」

私たちは、現代の文化や産業や科学の進歩が、世界の平和と発展に貢献することを、大いに期待しています。それは正しいことであり、今の時代に生きている人々の、次の世代に対する責任でもあります。しかし、それは「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来る」(21:27)日までの、「この世」(20:34)についての事柄であるという厳粛な事実を、キリスト者は認識していなければなりません。ミカ 3:12、エレ 26:6 に重ねて、イエスのこの言葉は聞かれねばならないのです。

v.7 「そこで、彼らはイエスに尋ねた。“先生、では、そのことはいつ起こるのですか。”」

今日カトリック信者の多くが、“死者の復活”を本気では信じていないように、“キリストの再臨”や“神の国の到来”が教会の宣教の核心的主題であるということも、ほとんど理解していません。それが“この世の子ら”の特性であって、使徒たちもかつてはそうだったのです。しかし、その使徒たちと、使徒たちの宣教によって信じた原始教会の信徒たちの信仰によって、新約聖書が、また福音書が生み出されました。そしてその唯一の原動力は、死者の中から復活して神の右の座に着かれた“勝利者キリスト”の“福音”でありました(ロマ 8:31-39、Iコリ 15:50-57 参照)。

vv.12-14 は、この“勝利者キリスト”の“福音”によって“新しく生まれた人々”についてだけ言えることであって(ヨハ 3:3、ロマ 6:3-11)、この“福音”が信じられ共有されていないところでは、理解が出来ません。多くの人々が“キリストの福音”を、その“終末的使信”を忘れてしまっていた時代にも、……そしてまさに現代もそうなのですが……、カトリック教会は使徒継承によってこの“勝利者キリスト”の“福音”を、聖伝と聖書という形で保持して来ました。明らかにイエスは、この“福音”が証しされること自体が終末のしるしであると言われたのであり、カトリック教会は決して誤解することなく、これを受け継いで来ました。今年も私たちは、王であるキリストの祭日の一つ前の主日に、この“福音の朗読”を聞いているのです。

2. Ⅱテサ

“全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝える”(マコ 16:15)ということが、あたかも教導職の専管事項であって、信徒はそれとは別な世俗的生活の中で信心深く生きればよいという考え方がありますが、私たちは今それを反省してみる必要があります。

キリストの福音を宣べ伝えるという務めは、個人ではなくて教会の務めであることに注目しましょう。テサロニケの教会について使徒パウロは、「主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州とアカイ

ア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられている」と書いています(Iテサ 1:8)。さらに信徒一人一人のことを感謝して、「神の言葉が、信じているあなたがたの中に現に働いている」と言いました(Iテサ 2:13)。

そのことを前提にして、「受けた教えに従わないで」(3:6)「余計なことをしている」(v.11)とはどういう意味かを考えるとよいでしょう。“おもに話す者”(使 14:12)が司祭や修道者であっても、福音の宣教はそれを取り囲む信徒たちによって支えられているのでなければ、“少しも働かず、余計なことをしている”(v.11)という使徒の叱責が当てはまるのではないのでしょうか。

まして信徒たちの中に“神の言葉が現に働いている”のでなければ、そのような教会から“本当に正しくキリストの福音を語る”司祭や修道者が生まれる筈もないということ、真面目に考えるべきでしょう。

3. マラ

v.20 「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。」

これを個人的信心と考えないで、「あなたたち」、すなわち教会の救いの問題として理解しましょう。“あなた”ではなくて、「あなたがたが神から選ばれた」と、パウロは表現しました(Iテサ 1:4)。実に私たちは“福音を通して招かれ”(IIテサ 2:14)、“自由な選びによる神の計画”(ロマ 9:11)によって、御国を受け継ぐ民とされました(フィリ 3:20-21)。

私たちはそのように理解して、「聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を」信じているのです。

アーメン、ハレルヤ。

11月21日 王であるキリスト

サム下 5:1～3 コロ 1:12～20 ルカ 23:35～43

1. ルカ

v.38 「イエスの頭の上には、“これはユダヤ人の王”と書いた札も掲げてあった。」

私たちは典礼暦の最後の主日に、この福音の箇所を朗読を聞き、一緒に十字架にかけられていた犯罪人のもう一人にイエスが言われた「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」という言葉を含めて、イエスが王であるとはどういう意味なのかを考えます。

すでに久しく、カトリックでもプロテスタントでも、平均的な信者の一般的傾向は、キリストは人間の魂の中で支配する霊的な王であって、この世界を何らかの形で支配するような王ではないという理解が普通でした。終末的な神の国の到来を待ち望むということ、幻想に過ぎないとして否定し、その結果、イエスを偉大な宗教的真理について教える一人の教師に過ぎない、と考える人々が多いのです。

1925年、当時の教皇ピオ十一世は、10月最終主日を“王であるキリストの祭日”と決めました。その後この祭日は典礼暦の最終主日に移されましたが、その背景にある重大な神学的な意義については、ほとんど信徒向けには語られて来なかったように見受けられます。第一次世界大戦後にヨーロッパで起こった神学闘争とその結果である“バルメン宣言”(1934年)が一方にあり、他方には時を同じくしてロシアからの避難民の神学者を通して入って来た、原始教会の終末論を失わずに保っている東方教会の思想の大きな流れがありました。そして再び、聖書はそれ自身の前提の上に立って読まれなければならないということが、次第に理解されて来たことが、恐らくカトリック教会におけるこの祭日制定の背景であろうと考えられます。

私たちは今朝の福音のテキストを、もう一度、キリストの勝利の光の下において十分に聞こうではありませんか。犯罪人のもう一人にイエスが言われた「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」という言葉によって、彼の波乱に満ちた生涯は無意味なものではなくなったように、私たちカトリックの子らにとってもこの典礼暦の一年が決して無意味なものではなかったと、そう言わせていただけますように。

2. コロ

復活の主イエス・キリストは、教会の主であるばかりでなく(v.13)、「天と地の一切の権能を授かって」(マタ 28:18)、「すべてのことにおいて第一の者となり」(v.18)、すべてのものをその足もとに従わせ(エフェ 1:22)、そして大いなる力と栄光を帯びて再び来られる(マコ 13:26)方であるということを考えましょう。このような宇宙的キリストは、使徒たちによって宣教されたようには、久しく私たちの教会では説教されて来ませんでした。

今日多くの国々で、キリスト教会は異教の民に包囲された少数民族の代表でしかありません。もはや国民の生活と倫理に影響を及ぼす強力な要素ではないのです。教会で語られる説教は、美しく愛に満ちて崇高ではあっても、人生の目的とこの世界に対する神の目的という究極的問題についてはその解決を知りませ

ん。王を持たない教会の説教は、“無力で頼りにならない”(ガラ 4:9)ものだからです。

コロ 1:12-20 を、私たちが神の言葉として聞くためには、これが コロ 1:21-23 によって支えられていることを、真剣に考える必要があります。

「あなたがたは、以前は神から離れ、悪い行いによって心の中で神に敵対していました。しかし今や、神は御子の肉の体において、その死によってあなたがたと和解し、御自身の前に聖なる者、きずのない者、とがめるところのない者としてくださいました。ただ、揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません。」

3. サム下

イスラエルの長老たちがダビデに油を注ぎ、彼をイスラエルの王としたのは、“主が仰せになったから”(v.2)でありました。ですから 詩 89:21 は、「わたしはわたしの僕ダビデを見だし、彼に聖なる油を注いだ」という主の言葉を記録しています。

そして、約束によってダビデの子孫から生まれたイエスは(ロマ 1:2-3)、天からの霊によって油注がれて(マコ 1:9-11)、さらには死者の中からの復活によって、神の子キリストと定められました(ロマ 1:4)。

典礼暦の最終主日に、私たちは共に十字架を見上げてミサをささげ、王であるキリストの勝利を高らかに賛美しようではありませんか。教会は現在も、将来も、イエス・キリストは全世界の裁き主であり救い主であると(使 10:42-43)、大胆に(使 4:29-31)宣言し続けなければならないのです。

アーメン、ハレルヤ。

11月28日 待降節第一主日

イザ 2:1～5 ロマ 13:11～14a マタ 24:37～44

1. マタ

vv.42, 44 「だから、目を覚ましていなさい。…… だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけないときに来るからである。」

典礼暦の新しい一年が始まりました。「主人が帰ってきたとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ」(ルカ 12:37)とされていることを思い、私たちの信仰の姿勢をもう一度整えましょう。

私たちがお迎えする再臨のキリストは、「かつておられ」(黙 4:8)、すでに「御自身の血によって、ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブ 9:12)同じキリストです。そしてこのキリストは、「今おられ」(黙 4:8)、聖霊を通して教会に働いて、その福音に私たちの目を開いてくださる方です(II コリ 3:6-4:6)。

神が「御子によってわたしたちに語られた」(ヘブ 1:2)出来事としての福音に、私たちが“確かに聞く”という“ただ一つのこと”の上に、キリストの教会は基礎づけられ、支えられています(ロマ 10:14-16)。教会憲章がその冒頭で、“教会はキリストにおけるいわば秘跡”と述べているのは、まさにそのことです。ですから私たち信徒は、教会を通して受けたキリストの福音にしっかりと踏みとどまり、目を覚ましていなければなりません(コロ 1:21-23)。

ローマ教皇は使徒ペトロの後継者であって、全教会の牧者であるということの意味を、教皇自身や教皇を頂点とする聖職位階制度を有するカトリック教会そのものに、信徒の救いを保証する能力があるかのよように、誤解してはなりません。そうではなくて、聖ペトロを頂点とする使徒たちから受け継がれた福音こそが、「信じる者すべてに救いをもたらす神の力」(ロマ 1:16)なのです。

vv.40-41 「そのとき、畑に二人の男がいれば、…… 二人の女が臼を引いていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。」

教会が聖伝と聖書という形で受け継いで来ている“福音そのもの”への信仰によって、“主にしっかりと結ばれている”(I テサ 3:8)ということが、“目を覚ましている”(v.42) “用意している”(v.44)ことです。私たち信徒は、「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)キリストを信じ、「神の(国の)栄光に与る希望を誇りにして」(同 5:2)、新しい年を歩み始めましょう。

2. ロマ

v.11 「今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいている……。」

私たちは聖伝と聖書において、イエス・キリストに対する待望の中に生きた人々の証言と、かつて来られ

たイエス・キリストの出来事の想起の中に生きた証人たちの声を聞きます。神御自身が、聖伝と聖書を通してその大いなる救いの御業を語っておられます。教会は、この神のことばの上に建てられました。「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」(マタ 16:18)とは、カトリック教会が“使徒や預言者という土台の上に建てられ”、“そのかなめ石はイエス・キリスト御自身である”(エフェ 2:20)という意味に理解すべきでしょう。

教会が、その聞かされた“福音の希望”(コロ 1:23)に生きている場合には、教会は“夜は更け、日は近づき”“以前より、救いは近づいている”ということを知っているのです。しかし、歴史の教会はしばしばこの“福音の希望”に代えて、人間の善意による“良い計画”“良い活動”に励んで来ました。そして神のことばではなくて人間の計画によって判断される場合には必然的に、“キリストはなるほど大切だが、絶対に大切ではない。究極的にはキリストは必要ではない”という結論に至るのです。

3. イザ

v.3 「主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。」

私たちが知っているカトリック教会は、この預言者が待望したものと同じでしょうか。“主の教えは教会から、御言葉は聖伝と聖書から出る”ということ、多くの信者が実感しているでしょうか。

新しい年の初めに、私たちは心を新たにして呼びかけようではありませんか。“新しいイスラエルである教会よ、神の言葉の光の中を歩もう”と。 アーメン、ハレルヤ。